

獄中の作ごくちゆうさく
(高杉晋作たかすぎしんさく)

夜深人定四隣閑
短燭光寒破壁間
無限愁情無限恨
思君思父淚漣漣

夜よる深ふかく人ひと定さだまつて四隣しりん
閑しずかなり

短燭たんしよく
光ひかりは寒さむし破壁はへきの間かん

無限むげんの愁情しゆうじょう
無限むげんの恨うらみ

君きみを思おもい父ちちを思おもうて
涙なみだ
漣漣さんさん

解説 この詩は深夜の獄中における君父を思う悲憤の情をのべたもの。元治元年、晋作二十六歳のとき、長州萩の野山の獄中で作られた。

語釈 ※四隣＝近隣、となり近所の意もあるが、ここではあたり、四辺の意。※短燭＝たけの低い燭台。

※漣漣＝涙のしたたるさま。

通釈 夜はしんしんと更けわたり、人はとうに寝静まって、あたりはまったくひっそりしている。ひとり起きている私の、この野山の獄の室内の壁は破れ損じ、それをまた淡々と丈低い燭台の灯火が照らしている。こうして獄舎に幽閉されていることは無限の愁いであり、恨んでも余りあることである。しかもわがご主君ご自身勸をこうむる身、わが父として藩のためにどれほどか心労しておられるであろうに。ご主君のこと、父上のこと、あれこれ思えば涙がとめどなくあふれ流れてやまないのである。